

小学校と運動会

井ノ山 正文

運動会って

校庭から子どもたちの歓声が聞こえてきます。一年生が玉入れの練習をしていて、どうやら赤組が勝ったようです。次の時間は、高学年の組体操の練習です。笛の合図や音楽に合わせて倒立をしたり、

一緒に組んだ相手の子を肩に乗せたりしています。どの子も練習に一生懸命です。でも、時々教師の厳しい声も響きます。熱心な指導と力の入れ過ぎ、どこで折り合いをつけるのかは微妙なところです。さて、小学校の運動会は年間行事計画の中でも最大のイベントです。一日で全学年の子どもたちの体

育的活動の取り組みを保護者や地域の方たちに参観していただくのですから、当然といえるでしょう。

また、年間を通じて運動会の日のように多くの保護者の方たちが集まる日も少ないと思います。早朝から学校の門の前に並んで場所取りをするお父さん。

場所取りは、なぜかお父さんが殆んどです。開門と同時に、ダッシュでお気に入りのポイントへシートを広げて一段落です。多くの場合は、徒競走のスタート、ゴール地点が人気スポットです。

運動会の最中は、ビデオやデジタルカメラを持って我が子の撮影に熱心です。後でゆっくり観るのでしょうが、カメラのレンズ越しに見るよりも、目の前を力一杯走る姿を脳裏に焼き付けておくほうが良いのでは、と思うのです。しかしながら、運動会シーズン前後のテレビCMを何回も見ていると、「うん、今年はこのビデオで思い出作り！」となるのでしょうか……。

徒競走以外には、各学年とも表現（団体演技）や団体種目に取り組みます。表現では、低学年は創作ダンス的なものが比較的多く、中学年では「ソーラン節」や「花笠音頭」、「エイサー」などの地域色の豊かな踊りに取り組むこともあります。団体種目では、低学年では「玉入れ」や「置き換えリレー」などがあり、中学年では「棒引き」や「障害物競走」などがあります。また、高学年では「騎馬戦」や「棒倒し」などが一般的だと思います。

しかし、なんと言っても注目度一番は、色別対抗リレーになります。各学年・各クラスからリレーの選手が選ばれ、練習を繰り返し当日に臨みます。小学校でバトンを用いてリレーを行うのは中学年からですが、色別対抗リレーでは低学年の子どもたちもバトンを持って走ります。運動会自体が色別で得点を競う仕組みになっていきますから、時としてはリレーの結果が勝敗の行方を左右することにもなまり

す。応援係の子どもたちも「フレー！ フレー！！
○○組!!!」と必死に声を張り上げます。

そして、閉会式での結果発表や講評を終えて運動会は終わります。

運動会のはじまり

このような運動会がいつ頃から始まったのでしょうか。記録されたものによれば、日本で最初の運動会は、一八七四年（明治七年）に東京の海軍兵学校の寮生たちによる「競闘遊戯会」であったとされています。行った種目は、高跳び・走り幅跳び・徒競走などです。この頃徒競走は、ピストルの音で揃って飛び出すので「雀の巣立ち」ともいわれていたそうです。これ以降、一八七八年には札幌農学校で、一八八三年には東京大学で運動会が開催されましたが、まだまだ一般的ではなかったようです。

その後、学校行事として運動会が普及したのは、

一八八五年（明治十八年）に、第一次伊藤博文内閣の文相となった森有礼が、ドイツの教育思想を背景に学校令を制定したことが大きく影響しているようです。森有礼は、明治維新後の日本各地の学校を巡視する中で、体操や唱歌の重要性を説いています。

この時代の背景を考えると、富国強兵・殖産興業・文明開化の流れの中で急速な近代化と教育の普及の一環としての運動会の位置づけが見えてきます。

因みに運動会には万国旗がよく揚げられています。学校ごとの運動会が多く実施されるようになった大正時代に定着したようです。今では、「何となく賑やかでいい」などの感覚で揚げられています。これはこれで歴史があるようです。また、保護者来賓の種目としてよく行われる「綱引き」、そして現在も多く小学校で実施されている「徒競走」は、明治時代からの代表的な種目であったようです。

運動会さまざま

このように考えると、運動会は国の施策で行われてきた感がありますが、それだけでは今日までの隆盛を説明できません。なぜ、現在も運動会が学校において重要なのかを考えると、運動会が「地域の祭り」の要素をもつからだと思えるのです。明治期から大正期にかけても学校の児童数を大きく上回る観衆が運動会の参観に来ていたようです。当時は花見遊山的な気分、「村祭りがやってきた」の雰囲気でも多くの人が歓声を送ったことでしょう。当時は、学校が文化の発信地であり、地域の象徴でしたから尚更のことと考えられます。

現在でも、運動会の日は「ハレの日」なのだと思います。運動会が近づくにつれ家族の中では緊張感が高まります。当日のお弁当や子どものコンディショニングに気をつかいます。そして、おじい

ちゃんやおばあちゃん、親戚までもが駆けつけます。子どもにとっては、ワクワク感と緊張感を味わう数少ない場面です。そして、自分を絶対的に応援する家族がいます。

地域の人々にとっても、現在の学校が失った「牧歌的な学校の姿」を垣間見る機会になっているようです。来賓席や敬老席には、毎年の運動会を楽しみに参観される方々がいます。このような期待感を学校は感じていません。ですから、通常の体育授業では扱わない、むしろ「伝統的」といった方が良いかもしれない様々な種目を、時間をかけて練習するのだと考えられるのです。

しかし、子どもたちはどのようなことであれ運動会を楽しんでいます。運動会後の感想で、A君は「きょう運動会がありました。と



でもあついひでした。お母さんとお兄ちゃんと二人のおばあちゃんが見に来てくれました。ときよう走は一番目でした。どきどきしたけど、いっしょうけんめい走りました。四位でくやしかったです。午後は、はじめてやったおうえんだんでした。のどがかれるほど、練習しました。本番では、ちよつとどきどきしたけど、じょうずにできました。きようは、ちよつとつかれたけど楽しかったです」と述べ、B

さんは「竹取物語（棒引き）では、二本差で負けました。八十メートル走では三位でした。本気をだせませんでした。くやしかったです。エイサーは、練習よりもじょうずにできました。足の高さ、声のおきさもしつかりできたと思います。リレーは、二番目に走った子がバトンをおとしてしまいぬかされたしまいました。結果は四位です。あともうすしだったのに、と思いました。でも、最後は赤組が勝って、とてもうれしかったです」と述べています。

自分の力を出し切ることや目的に向かって努力することなどが、運動会を実施するときの目標になっていますが、子どもたちの様子を見るとこの点は十分達成できていると思えます。

違いを認めあう運動会へ

しかし、どの子も同じような運動能力をもっているわけではありません。むしろ、みな違っているのが実態です。ですから、表現（団体演技）を除く徒競走を始めとする様々な種目には勝敗がつかず。この勝敗をどのように受け止めるのが運動会の別の側面としてあります。教師の立場から考えると、この点を十分に配慮した指導が必要となります。「勝つことのみ」を目的として取り組ませるような指導は減少しているとは思いますが、このことが目的化してしまうと子どもたちに軋轢が生じます。

このようなことがありました。以前勤務した学校

で、四年生は毎年「台風の目」という団体種目に組み組んでいました。その年もこの種目に組み組むことは既定方針でした。台風の目というのは、一本の棒を四人で持ち、置いてあるカラーコーンを回ってくる種目です。ところが、右足に麻痺が残るC君のことが話題になりました。C君は、走ることができませんが時間がかかります。どのように対応するかという話になったとき、教師間では様々な意見が出ました。「徒競走を含めて、途中から走らせる」、「参加できるものだけにしたらどうか」などです。なかなか、結論はでませんでした。

C君と一緒にクラスの子どもたちと相談しました。子どもたちもなかなか意見が出ませんでした。ある子が「やっぱり、勝ちたいよな」と言ったところから、話はどうも出てきました。作戦を立てようとか、教師と同様に途中からという意見も出ました。しかし、最後はC君が「みんなとおんなじにや

りたい」と話したことでまとまりました。「勝ちたい」という気持ちと「みんなで」という気持ちの折り合いができてきたのです。当日は、力の強い子がC君を支えるように走りきりました。でも、支えられたのはお互いだったと思うのです。

運動会を楽しむために

運動会は、やはり「地域の祭り」だと思っています。運動会という日に多くの人が出会い、子どもたちが力一杯演技し、家族でお弁当を囲む和やかな日があってほしいと思います。そのためには、学校は子どもたちの運動会への取り組みのプロセスに子ども同士の関係性を育てる配慮が求められていますし、保護者の方々は我が子のみでなく「子どもたち」を温かく見守る視点が必要なのだと思うのです。多くの小学校で楽しい運動会が開かれますことを……。

(新座市立西堀小学校)